

覺束な動かぬ山に咲くと見し花は夢路の春にやありけん
はかなしや照しもはてず浮雲に入にし月のあけぼのの空
夢かとよ心ぞまよふ浮くものゆくへにたぐふ短夜のつき
一、近衛公の合點を求む

廿日卑詠二十首、平田内匠大允職俊許へ愚札指添遣候。是
は以御内々近衛基熙公御覽に入度を以て也。去歲指遣候時
は、彼御家司今法辨何某入御覽候由、職俊への來狀落手す。
被經御覽候迄にて無御點の趣、此度は乍恐御點願趣也。

一、立秋の歌
廿一日立秋。

雲の色軒端の山の下かぜもすゞしくなりぬ秋やきぬらん
一、七夕の歌
出納豊後守職直、大嘗會繪圖并小忌衣・日蔭蔓等調進。

七夕卑詠
まれに逢ふうらみはよしや織女の契り絶えせぬ鶉のはし
秋といへどもまだ明易き今宵しもなど七夕の契そめけん
天の川浅きに似たる逢瀬かな思へば深きえにしなれども
一、先妣の忌日に

面謁條不能多毫候。恐惶謹言。

夷則念一

平田内匠允様

今大路出羽守

從四位下出羽守藤原光好なり

追而詠草の事遮て得御意候處、今般御遠慮の事候故、右
の通被仰出候。於拙者令迷惑候。併又々時節も可有御座
候條、重て可得御意候。近頃歌道執心奇特の由御氣色に
候間、能々御傳語可被成候。以上。

職俊より正庸への書中に云。近衛殿御氣滯にて、去五日仙
洞御所にての御法事にも、御斷り御出仕無之故、職俊件の
一卷持參候得共、御前へ不能出候。依之出羽守へ申談置候。
且又御遠慮に思召儀は、近年仙洞様と表向は別儀無之候得
共、攝關などの事に付、御内御不快に候故、近頃は御所勞
がちにて、諸家の歌添削も大方は御斷にて、折々御參内御
院參も無之に付、御遠慮に思召御様子に候。此段沙汰には
及間敷の趣也。

一、弘文院へ贈進の品々

近日釋菜に付弘文院學士へ、以御使札銅爵三筒・如意一柄・
燭臺二基御贈進候。此三品金澤の細工人金銀象眼なり。其

文月十三日先妣の忌日、奉五首和歌於牌前。
いとゞしく袖こそ濡るれ帯木の露と斗のえにしと思へば
戀ふれどもかひなき秋の袖の露ちりしは、その森の下蔭
隔てゆく秋を恨みて數ふればみそちにたらぬ三年成けり
白氏文集に故郷有母秋風涙。旅館無人暮雨魄といへ
るを思ひ出でて

故郷にすむさへ有るをたらちめのなき跡戀ふる雨の夕暮
常住無變といへる心を

春秋の光りもわかでとことには澄らん月の影をしぞ思ふ
一、近衛公家司よりの到書

八月七日詠草一卷、入近衛公御覽候旨にて、平田職俊より
到來。但於御點は當時御遠慮の趣有之、何方へも御氣色無
之旨。則左の通り。

葛卷氏詠草一卷并書狀一通、密々に及言上候處、於他鄉
か様の述作、鍛鍊の儀有之間敷候條、奇特の至被感思召
候。兼ては御點の事、其身願望の由申上候處、當時御遠
慮の事有之候故、何方より被相親候ても、於御點は御氣
色無之候間、先づ返納仕候。此通り御傳可然存候。餘斯

形狀は五十川剛伯・小瀬又四郎・室新助等へ被命、中華の製
を模候事。

一、中秋陰晴不定

降雨にぬれてもみまし名に高き月の桂のはなの香やす
月の色はいにける秋を思ひ出て曇もわかすしたふ宵かな
うちなびく尾花が末の白雲をもし出てすめる武藏野の月
待ち侘し秋の最中のかひもなく雨雲まよふむさしの原
むさしのやいく秋かけて忍ばまし今宵のつきを俤にして
晴曇り千里も同じ月といへばわれのみ顔になどか恨みん
草枕なぐさめがたきわが袖を哀れとばかり月はとへかし
詠むらん心もしらず故郷のきみが軒もる月をしぞおもふ
一、九月十三日清明

いかなればわきてや月のさえぬらん今宵も同じ長月の空
折残す菊のしら露色そへて名におふ月のかげぞにほへる
いかばかり秋を恨みん頼みこし今夜も月の明かならずば
又旅宿の月といへる意を。

かつは思ひかつは忘るゝ今夜かな名におふ月に古郷の空
一、十五夜不忍の池の邊にて